国鉄通学と城監督のサッカー部

吉田　英生（昭和49年卒）

私は亀山から国鉄と近鉄を利用して津高に通いました。国鉄紀勢本線には蒸気機関車（C57）が一九七三年九月三十日まで走っていましたので、二年半を汽車通学したことになります。亀山―下庄間にある安濃田トンネル（二一六・四m）が近づくと、煙におそわれないように客車の窓をあわてて閉めたものでした。また、なまこ壁（身近なところでは「くら寿司」のような壁）で個性的だった津駅舎が現在の駅ビル「チャム」に建て替えられたのは同年三月二十一日――ために無煙化までの半年あまりの間に、開業時は真っ白だった一番線ホーム側のチャムの壁は煙の犠牲となり真っ黒になってしまいました。おおむね一時間に一本の少なさに泣かされるのは今も同じですが、始業時刻に間に合うためには亀山発七時十二分の伊勢市行き列車に乗らなければならず、関・亀山方面からの「国鉄組」は生徒の中では誰よりも早く七時五十分ごろに学校に着いていました。人並み程度には受験勉強もしましたので慢性的な寝不足――それに追い打ちをかける「田舎はつらいよ」の早朝通学の中、眠気もさめるひとときは津から津新町まで一駅だけ乗る近鉄で、S学園のお嬢さんたちと一緒になる三分間でした。あと、国鉄がらみで苦々しく思い返すことは、高二の文化祭前に夜遅くまで準備をしたときに、津発二十一時五十二分の亀山行き最終列車に乗り遅れたこと。当時は、そのあと二十二時二十分発の東京行き寝台急行「紀伊」があったのでやむなく乗りましたら、車掌さんにB寝台上段／中段料金一、一〇〇円と急行料金一〇〇円と運賃八〇円の切符を切られました。現在の津から亀山の運賃は三二〇円ですので、鉄道に関して当時の物価は四倍としてお考えください。その車掌さんは職務に忠実で当然といえば当然のことをしただけだったとは思うのですが、〝たった二〇分の乗車で一、二八〇円！〟という数字は四十五年経っても未だに忘れません。「規則はつらいよ」トホホ…。

高一と高二の二年間は文字通り毎日がサッカー、蹴蹴蹴蹴蹴蹴蹴：月～土曜の練習に加えて、シーズン中は日曜に試合で県内のいろんな学校に行きました。写真は修学旅行先の蔵王の御釜をバックにした想い出の一枚で、後列左から小竹惟校長先生、小畑良洋、原田直樹、中村俊樹、川口寛、正木郁夫、筆者、大杉啓二、城秀一先生、前列左から中西秀伸、西村修一、大平陽一、神戸洋史、松村尚。監督の城先生は、四日市中央工業高校サッカー部の名監督と知られた城雄士先生のお兄さんでした。その四日市中央工業高校に終了直前まで1―0でリードしたものの最後の最後で逆転負けしたときには、全員で泣きました。城先生には、津工業高校との練習試合前半で緊張感を欠いたプレーをしたときと、大雨の中で練習した後にプール脇のシャワーを泥だらけにしたままにして苦情が出たときの二回、強烈なビンタを食らいました。今ですと体罰云々となるかもしれませんが、城先生に心身ともに厳しく鍛えていただいたことを、津高時代の貴重な宝だと思っています。城先生は惜しむらくは二〇〇〇年七月二十二日に亡くなられ、昔を一緒に語ることができなくなりましたが、われわれ同期は還暦を過ぎた今もメーリングリストで頻繁に交信し、毎年正月二日には新年会を続けている次第です。津高に感謝！

（注）国鉄の発車時刻は一九七二年十月の時刻表によります。

京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻教授（連絡先：sakura@hideoyoshida.com）

伊勢志摩サミット　日本酒で乾杯顛末記

清水　慎一郎（昭和51年卒）

平成二十八年五月にG7伊勢志摩サミットが、三重県志摩市賢島の志摩観光ホテルを会場として二日間の日程で開催されました。この首脳会議の最初のワーキングランチにおいて、弊社の「作智（さくさとり）　純米大吟醸　滴取り」が乾杯用のお酒として使われました。また、カクテルタイムの時間には、「作穂（さくほ）乃智（のとも）　純米」が提供されました。そのほか今回のサミットにおいては、三重県内の酒蔵の日本酒を始めとして全国の日本酒がワーキングランチ、ワーキングディナーなどの乾杯酒、食中酒として数多く提供されました。食事に使われた食材も、松阪牛、伊勢海老、アワビはもちろんのこと、三重県の海の幸、山の幸を豊富に用いた料理が振舞われ、「美し国三重」を大いにアピールしました。

乾杯の酒はどこの日本酒になるかについて、事前にもマスコミで取り上げられました。というのも、前回の洞爺湖サミットにおいて日本酒で乾杯したという報道があったからでした。それでは、それ以前のサミットにおいては、一体どのようなお酒で乾杯が行われていたのでしょうか。たぶん、シャンパンだったのでしょう。これまで日本では、海外の正式な賓客をもてなす際には、フランス料理とフランスワインが提供されていたのではないでしょうか。もしかして、鹿鳴館の時代から、ずっとそうだったのではないかとも思えます。それが、今回は、最初のワーキングランチのメニューは和食であり、日本酒で乾杯し、食中酒も日本酒であったということは、ある意味画期的な出来事だったと思っております。

この背景には、世界的な和食ブームがあると思われます。平成二十五年十二月、「和食　日本人の伝統的な食文